©日本記者クラブ 2018

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/



撮影：長島　一浩（朝日新聞社映像報道部）

上野は“パンダ・イヤー”

ジャイアントパンダの赤ちゃん、シャンシャン（左）と母親のシンシンの一般公開が始まった。赤ちゃんパンダが公開されるのは29年ぶり。初日、46倍の抽選に当たった約1400人が観覧した
=2017年12月19日　東京・上野動物園

周到な準備と覚悟で回避したい「想定外」

理事長　小田　尚

あけましておめでとうございます。今年ほど迫り来る「危機」を肌で感じながら、新たな年を迎えたことはないのではないでしょうか。

北朝鮮情勢が、日本の安全保障を揺るがしています。北朝鮮は、核実験や大陸間弾道ミサイル（ＩＣＢＭ）発射などの軍事挑発を続けるのか、米国などとの対話に転じて核開発計画を中止するのか、分水嶺の年になりそうです。

北朝鮮が、米本土を核搭載ミサイルで攻撃する能力を獲得しつつあります。日米韓３カ国が連携し、中国の協力を仰いで北朝鮮への経済制裁を強めて、自制を求めているのが現状です。米朝両国の指導者の行動が予測不能ということも手伝って、米国と北朝鮮の軍事衝突があり得るとの見方もささやかれています。

そうなれば、日本も火の粉をかぶります。北朝鮮が日本をミサイル攻撃することも、もはや「想定外」とはいえません。

報道を担うわれわれも、正念場を迎えます。そもそも安倍首相が昨年の９月解散―10月総選挙を仕掛けたのは、北朝鮮情勢が背景にありました。

（２ページに続く）

（1ページから続く）

その公示直前の日本記者クラブ主催の8党首討論会で、首相は「あらゆる手段の圧力を高め、北朝鮮に、『政策を変えるから話し合ってもらいたい』といわせる状況を作る必要がある」と主張しました。軍事オプションと制裁強化による対話の解決を並行して模索する戦略は「出口」が見えないこともあって議論が深まらず、重要争点化に至りませんでした。

そこは反省点でもあります。

日本記者クラブでは、北朝鮮への直接取材が困難なため、北朝鮮に関係が深い、中国、米国、韓国の政治家、学者、軍人、さらに、日本人研究者らをゲストに招き、記者会見を重ねてきました。例えば、「北朝鮮の核とミサイル」と題したシリーズは、これまで計8回を数えます。



衆院選８党党首討論会（2017.10.8）の冒頭であいさつする小田理事長（左）　写真＝津野義和・ガンマプレス

今年も、北朝鮮危機に対応するために、外交・安全保障、危機管理の専門家らの識見を聞く機会を増やしていきたいと思います。

正しく恐れるためにも、報道の役割や責務は大きいと思います。正確な軍事知識、さまざまな想定実験を通じて、不測の事態に備える覚悟を持ちたいものです。

昨年は、その予測できないトランプ米大統領に世界が振り回された1年でした。日本記者クラブは、年初から「トランプ政権・米国と世界の行方」と題するシリーズを開始し、内外の米国政治研究の専門家の話をうかがいました。

11月のトランプ訪日直後には、赴任して間もないハガティ駐日米大使を記者会見に招き、トランプ大統領のアジア歴訪の成果について聞きました。グテレス国連事務総長が年末に初来日した際は、1泊2日の厳しい日程の最後に当クラブでの会見に臨んでもらいました。

今年は、アベノミクスなど経済の行方も大きな関心事です。年明け恒例の専門家による連続会見「経済見通し」は、今年は7回を予定しています。これは近年では最多の回数です。

日本記者クラブは、これまで経済分析ばかりでなく、経済最前線で活躍している経営者を「チェンジ・メーカーズ」シリーズで呼び、現場の声を聞いてきました。

登壇したのは、ジャスパー・チャン・アマゾンジャパン社長、澤田秀雄エイチ・アイ・エス会長兼社長、宮坂学ヤフー社長、松本晃カルビー会長兼ＣＥＯらです。

大谷翔平選手の大リーグ挑戦表明の場に

昨年、話題を呼び、大きなニュースとなった記者会見は、石原慎太郎元東京都知事、前川喜平前文部科学事務次官、小池百合子東京都知事、衆院選８党党首討論会、民進党代表選立候補者討論会などがありました。

政治以外でビッグニュースになったのは、日本ハムの大谷翔平選手でした。幸運なことに、大谷選手が大リーグ挑戦を公式に表明する初めての会見となったのでした。

「今の時代」を多角的に知るために、近年は、文化、芸能分野からもゲストを招いています。将棋の世界で前人未到の「永世七冠」を達成した羽生善治さんは好評でした。他に、災害支援に力を入れている歌手のさだまさしさん、末期がんの宣告を受けながら新作を完成させた映画監督の大林宣彦さん、70年近く現役詩人として活動を続けている谷川俊太郎さんなどが登壇しました。

日本記者クラブでは、記者会見と並んで研修会や記者ゼミが引き続き重要です。建設的な活動となるよう知恵を出し合いたいと考えます。

記者ゼミは「ＩＴ講座」と「調査報道」をテーマにしています。ＩＴは昨年度からの継続ですが、調査報道は今年度が初めてで、２本立ても初めての試みでした。

いずれの講座も、ＩＴに強い、あるいは調査報道に実績がある各社のベテラン記者が講師となり、各社の中堅、若手記者を鍛えるという当クラブならではの内容です。調査報道は、足で稼ぐ伝統的な取材から、新時代にふさわしいネットによる情報収集まで、講師の現場経験に基づいた実践的な講座が続いています。

日本記者クラブは今年も、報道の信頼度を高めるべく精進していきます。会員の皆さんの一層のご支援、ご助力をお願いします。

（読売新聞グループ本社取締役論説主幹）

新年にあたって 1・2
小田尚理事長
新春随想 4・5
斎藤史郎元理事長
クラブゲスト 6
アルトマン・ロシア・ホロコースト研究教育センター共同議長／福田安志・アジア経済研究所上席主任調査研究員、畑中美樹・国際開発センター研究顧問／ビーズリー国連WFP事務局長／カーン駐日パキスタン大使
会見リポート 7・10
羽生善治・棋士／北欧５カ国駐日大使共同会見／グテレス国連事務総長／谷川俊太郎・詩人／平木靖成・岩波書店辞典編集部副部長／境家史郎・首都大学東京准教授／岡田克也・無所属の会代表／枝野幸男・立憲民主党代表／玉木雄一郎・希望の党代表
第５期記者ゼミ 11
ワーキングプレス 12・13
カタルーニャ独立問題
朝日新聞社パリ支局長 青田秀樹
座間９遺体事件
日本テレビ社会部副部長 勝田真司
新・列島報告 高知県 14
明治維新150年
高知新聞社学芸部 楠瀬慶太
被災地通信 岩手県 15
交通網の開通・再開
岩手日報社報道部 稲垣大助
リレーエッセー 16
２人の独女性メダリストの涙
下野新聞社社長 岸本卓也
マイBOOKマイPR 17
写真回廊 20

３日連続の大物会見、大きな反響
対談形式で会見の新モデル提示

12月も多彩なゲストが登場したが、特に13日からの３日間は、永世七冠となったばかりの羽生善治さん、国際政治のキーパーソンである国連事務総長グテレスさん、「国民詩人」と呼ばれる谷川俊太郎さんと、それぞれの分野のトップが連続して会見し、連日、当クラブの象徴である「緑の緞帳」が紙面や画面に登場した。この３会見は、ゲストの高い知名度だけでなく、会見の新しい在り方に示唆を与え、また残しておきたいエピソードもあるので、ここで紹介してみたい。

羽生会見と谷川会見は、いつものようなゲストの単独スピーチではなく、司会者との掛け合いで進行する対談形式を採用し、大きな効果を上げた。

会見が「対局」と「舞台劇」に

羽生会見の司会者は、日本テレビの小栗泉政治部長。当日、「羽生、井山（囲碁七冠）両氏に国民栄誉賞検討」の報道があったばかりで会場は満杯となった。

小栗さんは事前打ち合わせもなく、ぶっつけ本番の司会だったが、連敗の少なさ、若手の台頭、「手の震え」といった「将棋素人」とは思えない将棋関連の質問から、専門記者は聞きにくい家庭での様子まで、柔らかな口調で「味のいい手」を連発し、見応えのある「対局」となった。

控室で聞いた羽生さんの発言も興味深かった。

「コンピューターの指し手には時系列がなく、次の最善手だけ。成功確率の高い手を指しているが、完全ではない。コンピューターは完全という誤解がある」

一方、詩人の谷川さんの司会者は読売新聞の尾崎真理子編集委員。こちらは谷川さんとの長時間インタビューで分厚い本を書いた専門記者。戦後詩の流れを解説しつつ、テンポよく質問、谷川さんもジョークを交えて各詩人の評価、自作評、日本語論を展開した。谷川さんによる自作の朗読や谷川さん作詞の歌を最後に流す演出もあり、名優２人の共演による「舞台劇」のような会見となった。

この日はたまたま谷川さんの86歳の誕生日にあたり、会見後、事務局からクラブレストラン「アラスカ」特製のアップルパイを谷川さんにプレゼントした＝写真＝。



両会見とも、司会者とゲストの見事な「共同作業」によりライブ感のある高品質の会見が実現した。「ぜいたくな時間だった」との出席者の感想もあった。周到な準備で会見の新たなモデルを示していただいた司会者お２人に感謝したい。皆さんもぜひ動画でご覧ください。

「遅刻大臣」にも笑顔で対応

グテレス国連事務総長は、国連難民高等弁務官時代には当クラブの常連で今回が８回目の登場。分刻みの超過密日程にもかかわらず、会見に応じてもらった。

ただちょっと残念なこともあった。会見後、当クラブ控室で某大臣（外務ではありません）の表敬訪問が予定されていたが渋滞で到着が遅れ、事務総長は30分も待ちぼうけ。某大臣は出発直前に間に合い、グテレス氏は嫌な顔もせず笑顔であいさつしたが、クラブ事務局としては「これなら会見をあと10分間長くできたのに」とぼやきたくなった。

（専務理事　土生修一）

新春随想

的が外れては いないかな

斎藤 史郎
（日本経済研究センター参与）



さいとう・しろう
1948年生まれ　72年慶應義塾大学卒　日本経済新聞社入社　東京本社経済部長　編集局長　専務取締役などを経て　2015年から日本経済研究センター会長　17年6月退任　同参与に　2009年から11年まで日本記者クラブ理事長　『異説・日本経済』などを監修　最近の編著書に『逆説の日本経済論』
美術団体二元会委員・日本美術家連盟会員として絵画制作活動も

とてつもない勢いでデジタル革命が進んでいる。

電車に乗れば10人中、7、8人はスマホに夢中だ。若者はＬＩＮＥを使った友達とのおしゃべりや情報交換に忙しい。ゲームも楽しめれば音楽も聴ける。レストランの予約もできれば店への地図もたちどころに見つかる。

スマホはカメラにもなればテレビ電話にもなる。書斎で調べ物をするのに百科事典の代わりに、端末に向かって単語を発すれば情報を引き出せる。生活品もネットで注文すれば一両日中には手に入る。パソコンを使えば在宅勤務や遠隔医療も可能となる。全てのモノがインターネットでつながるＩＯＴの広がりで、企業経営の姿も変わってきた。人工知能の時代も到来しつつある。

価格ゼロ経済の出現

コンピューター、インターネットを軸としたデジタル革命である。全ての情報を0と1に記号化し瞬時に処理して圧縮・蓄積・分析・伝達が可能となる世界である。しかも何度使っても劣化しない。再生産コストが限りなくゼロに近づく。サービスはどれも安く、ただ同然のケースも珍しくない。消費者が喜ぶべき快適な価格ゼロ経済の出現とも言える。

ところが、この変化に国内総生産（ＧＤＰ）統計が追いつけなくなっている。名目ＧＤＰに計算されるのは有料取引のみである。無料取引は原則、名目ＧＤＰには響かない。減ることすらある。音楽や映画がネット経由で配信されたら、消費者が払っていた映画代やＣＤ代はＧＤＰ統計からは消える。設備を共用するシェアエコノミーで消費者は便利になってもＧＤＰには反映されにくい。

物価統計にも疑念が生まれている。物価統計とは同じ商品の値段がどう動くかを示す統計である。全く新しい商品なら、定着するまでは統計の対象にもならない。商品サイクルが短くなればなるほど捉えるのは難しくなる。

既存商品でも機能が向上していたら実質的に安くなったとみなす。だが、これほど急激な技術進歩の下ではどの程度安くするのが妥当か。確かなモノサシがなく、統計担当当局は悪戦苦闘する。それでも差し引き方が不十分という声がある。「真の消費者物価はさらに低い」という説である。目に見えぬ物価下落とも言える。

米国の経済諮問委員会（ＣＥＡ）元委員長のマーティン・フェルドシュタイン氏も米国の物価統計について品質調整が過小で物価は高めに現れていると分析する。「そのために実質ＧＤＰは過小推計されている。先進国共通の問題だろう」と語る。わが国の代表的な経済統計研究者の一人、渡辺努東大教授もＧＤＰでは人々の効用・満足度が測りきれなくなっているとみる。実際のＧＤＰの

数字より人々は、実は豊かという説である。価格と効用の断絶、GDPと効用の断絶。国際機関や国際的な統計学会でも騒ぎ始めた。

そうと知ってか知らずか、政府・日銀は消費者物価上昇率2%や名目GDP600兆円の達成に必死である。労働力不足を背景に消費者物価もさすがに少しずつ上昇するだろうが、どんな中身の2%か、どんな中身の600兆円か。そもそも何のための目標達成か。デジタル革命のもと、アベノミクスや異次元緩和が想定していた的が、いつの間にかズレているということはないだろうか。

頭痛いトランプ哲学

的外れのもう一つの代表例は、トランプ米大統領の貿易政策だろう。大統領は来日時にも対日赤字の是正を求めた。直感で動くトランプ氏は「輸出は富の源泉、貿易収支（経常収支）の黒字が何より大切」と、信じて疑わない。しかも2国間の均衡にこだわる。

どこの国の経済にも得意、不得意はある。2国間の均衡にこだわれば、あちこちで欲しくもない商品を買うか、得意商品の輸出をわざわざ止めることになる。

例えば、日本と産油国・ブルネイとの不均衡は著しい。日本のブルネイからの輸入額は輸出額の20倍、つまり日本の大幅赤字である。これを均衡させようとすれば、日本が原油輸入を今の20分の1にするか、ブルネイが欲しくもない商品を日本から大量に輸入するしかない。ブルネイにも日本にも不幸なことである。

資源配分がゆがみ世界貿易が縮小均衡に陥る道である。30年前の日米貿易摩擦の悪夢がよみがえる。幸い日本政府の対応が今のところ冷静なのが救いだが、なお予断を許さない。

それでは、多国間で考えた場合はどうか。本当に貿易赤字が悪く、黒字が好ましいのだろうか。

確かに貿易赤字になればお金が不足するとも言える。だが、人々にとり大切なのは経済成長を安定的に続けられるかどうかである。資金不足は海外からの資本調達で乗り切ればよい、というのが冷静な経済理論の教えるところである。

19世紀の米国は長い間、経常赤字だった。カナダはここ1世紀余り赤字基調で、オーストラリアは40年も黒字を記録していない。だがどこも経済は発展し続けた。海外からきちんと資本調達ができたからだ。問われたのは国家の信認・発展力である。「悪い赤字」もあれば「良い赤字」もある。

もっとも、トランプ氏のこの的外れを正すのはそう簡単ではない。ナショナリズムと隣り合わせの重商主義政策であり根は深い。「黒字が何よりも大切と、実は多くの日本の政治家や経営者も信じている」と、ある政府関係者はため息をつく。

長寿を生かす

的外れかどうか、論争の余地のあるもう一つのテーマは人口高齢化問題である。多くの人は人口減少や高齢化は日本の将来を危うくすると考えている。

だがこうした見方は一面的と、異議を唱える向きがある。暮れにお会いした東京大学元総長の小宮山宏氏もそうだった。「高齢化とは長生きすることです。文明発祥以来、人類が求めてきたことで、高齢化の否定は文明の否定と同じことです」と歯切れが良い。

日本人の平均寿命の歴史を調べてみると、縄文時代で15歳前後、江戸時代で30歳代というのが多数説のようだ。短命だったのは衛生環境が悪く、赤ちゃんがすぐに死んでしまい、病死もはるかに多かったからである。男女とも平均寿命が50歳を超えたのは終戦後である。その後、医療の進歩を背景に寿命は年々伸び続け、90年代には世界トップクラスの長寿国になった。喜ぶべき快挙とも言える。

肉体年齢の若返りも著しい。健康寿命も大幅に伸びている。これまで15歳から65歳未満を「生産年齢」、65歳以上を「高齢者」と呼んできたが実態とズレが生じている。日本老年医学会や老年学会は高齢者の定義を75歳以上にしたらどうか、と言い始めた。

確かに、めでたい長寿化を生かさない手はない。女性活躍とともに高齢者の労働参加や社会参加、それを前提にした社会保障制度改革。検討の余地は大いにありそうだ。

人間は当面の課題解決にまい進すると本来の目標や意味を忘れてしまうことがある。ブログやツイッターの隆盛で、人々は自分の都合の良い事実しか信じない時代になってきた。多面的にモノを観るのはやはり難しい。ジャーナリズムが忘れてはならない点だろう。

下記のゲストの会見リポートは
7～10ページに掲載しています

羽生　善治　棋士・永世7冠

■12・13（水）記者会見／司会：小栗泉委員／出席：142人／会見詳録

北欧5カ国駐日大使共同会見「北欧モデル最新情報」

デンマーク：フレディ・スヴェイネ大使
フィンランド：ユッカ・シウコサーリ大使
アイスランド：ハンネス・ヘイミソン大使
ノルウェー：トム・クナップスクーグ参事官
（リーメスタ大使急病のため代理）
スウェーデン：マグヌス・ローバック大使

■12・13（水）記者会見／代表質問：竹田忠委員／司会：石川洋事務局／通訳：渡辺奈緒子、秋山賛／出席：92人

アントニオ・グテレス　国連事務総長

■12・14（木）記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：西村好美、渡辺奈緒子／出席：130人

谷川　俊太郎　詩人

■12・15（金）著者と語る『詩人なんて呼ばれて』／司会・聞き手：尾崎真理子委員／出席：92人／会見詳録

平木　靖成　岩波書店辞典編集部副部長

■12・18（月）著者と語る『広辞苑第7版』／司会：小川記代子委員／出席：90人

境家　史郎　首都大学東京准教授

■12・19（火）著者と語る『憲法と世論：戦後日本人は憲法とどう向き合ってきたのか』／司会：川上高志委員／出席：57人

岡田　克也　無所属の会代表・民進党常任顧問

■12・20（水）記者会見／司会：倉重篤郎委員／出席：87人

枝野　幸男　立憲民主党代表

■12・21（木）記者会見／司会：平井文夫委員／出席：95人

玉木　雄一郎　希望の党代表

■12・22（金）記者会見／司会：島田敏男委員／出席：76人

福田　安志　アジア経済研究所上席主任調査研究員（右）
畑中　美樹　国際開発センター研究顧問



多数の王族逮捕で揺れるサウジを解説。「ムハンマド皇太子は『団塊の世代』に支持され開発独裁型指導者になる可能性がある」（福田）「皇太子による自由化を含む諸改革実現には時間がかかる。国民が我慢できるかどうか。イスラエルとの接近にも注目」（畑中）

■12・6（水）「激動するサウジアラビアと中東情勢」／司会：出川展恒委員／出席：81人

会見余話



●パキスタンのチャイが大好評

カーン駐日パキスタン大使の会見終了後、会見場で大使館からチャイ（紅茶）とお菓子が振る舞われた。チャイは、大使館職員がクラブの厨房で用意した。独特のスパイスとミルクが入った濃厚な味で参加者に大好評だった。

カーン大使は日本での留学経験もあり、大の親日家。好きな日本料理はなんと「日本風カレー」。先日もプレスセンタービルのレストラン「アラスカ」のカレーを「これはおいしい」と日本語で絶賛していた。

イリヤ・アルトマン　露・ホロコースト研究教育センター共同議長



杉原は「命のビザ」で多数のユダヤ人を救った外交官。発給を受けたユダヤ人はソ連を通過し日本に向かった。従来、ソ連の対応が不明だったが、ソ連の公文書を調査した結果、「ビザ発給代が欲しかったソ連はユダヤ人たちに通過ビザを発給した」と結論づけた。

■12・5（火）「ユダヤ難民救出をめぐる杉原千畝とソ連―新事実浮上」／司会：石郷岡健元委員／通訳：吉岡ゆき／出席：47人

デビッド・M・ビーズリー　国連世界食糧計画（WFP）事務局長



米下院議員、州知事を経て昨年4月から現職。「紛争に起因する飢餓が増え、その対策で費用がかかり、非紛争地への支援が不足」「北朝鮮についてはWFP現地チームの報告を待っている」「米国は国連への最大拠出金国であり、単独主義になったとは思わない」

■12・12（火）記者会見／司会：播摩卓士委員／通訳：森岡幹予／出席：32人

アサド・マジード・カーン　駐日パキスタン大使



日本勤務経験者。「最初の勤務地に大使として戻るのは外交官として究極のロマンス」と挨拶。同国は「テロとの戦い」の最前線で苦闘してきたが、「近年は治安も安定し、国際的にも『アジア経済の次の成長エンジン』と評価されている」と強調した。

■12・12（火）囲む会／司会：土生修一専務理事／通訳：森岡幹予／出席：33人

羽生　善治　棋士・永世七冠
将棋の「本質」語る



会見当日の朝、政府が「国民栄誉賞」の授与を検討しているというニュースが飛び込んできた。プロ棋士になって、31年。「検討していただけるだけでも名誉なこと。引き続き棋士として、きちんとまい進していきたい」。淡々とした語り口が、むしろ威厳さえ感じさせた。

12月5日に第30期竜王戦を制し、唯一残っていた「永世竜王」の資格を得た。「1つの大きな地点にたどり着くことができた。自分としても感慨深く思っている」。勝ち筋が見えたときに手が震えたのは、その瞬間に「われに返る」からだという。

プロ棋士の「頭の中」も垣間見せてくれた。将棋にさほど詳しくない私さえ「なるほど」と感じるのは、それが将棋の本質を語り、社会の本質ともつながっているからだろう。

例えば、棋士としての自信を問われ、「棋士は何十手も何百手も読めるので、常に先を見通して考えているイメージをもたれていると思うが、実際はそんなことはない。十手読めても、現実に起こる十手先の局面を想定することは、ほとんどできない。実際に起こるのは予想外、想定外のケースがほとんどで、やっていることは意外と暗中模索」。

相手があることでもあり、言われてみれば、その方が当然のように思える。現実の社会を見ても、「十手先の局面」は、たいていは「予想外、想定外」のことばかりである。

AI（人工知能）の登場で将棋は変わったのか尋ねられると、「コンピューターは膨大な情報を生み出してくれる。それを受け入れるか、受け入れないかは、人間の美意識によるところが非常に大きいと思う」と語った。

将棋の将来については、「指すとか見るとか、さまざまな形で、日々の生活の中で少しでも浸透し、存在してほしいと日々、思っている」と述べた。多くの言葉が文化としての将棋を語っていたことが、印象深かった。

企画委員　朝日新聞社編集委員　上田　俊英

北欧5カ国駐日大使共同会見
ベーシック・インカムで誰でも毎月7万5000円！

高福祉・高負担なのに、経済成長も結構高い。日本と対極（？）にある北欧5カ国の大使に直接聞こうという日本記者クラブ2度目の企画。

今回、特に注目が集まったのは、フィンランドが国レベルとしては史上初の実験に踏みきった「ベーシック・インカム」。国民全員に無条件に一定の現金を配るという夢のような話。実験は2018年12月までの2年間で、25歳から58歳までの失業者2千人をランダムに選び毎月7万5千円を支給する。所得制限はなく、就業しても給料にプラスして、もらい続けるという。

日本でも究極の社会保障として議論する人はいるものの、労働意欲をそぐことが最大の課題、と思っていたら、フィンランド大使によると何と真逆だという。「目的は働いてもらうこと。失業者だけに支給すると、手当てをもらうために仕事をしないインセンティブの〝ワナ〟にはまってしまう。これを避けるために働いても、働いていなくてももらえるようにする。こうすれば、たとえ短期的な仕事でも、まず働いて収入を増やそうということになる。フリーランサーや自営業の人にも向いている」。うーんなるほど。



目からうろこの話は続く。ノルウェーは男女平等で国会議員の4割は女性。兵役義務があり、兵役を務めている人の3分の1は女性という。

アイスランドは高い教育レベルを国際化が支えていて、人口の1％ぐらいはいつも海外留学していることになるという。

スウェーデンは欧州の中で人口一人当たりトップの大量移民を受け入れながら、この負担を長期的なチャンスにかえると大使は希望を語る。

そしてデンマークでは企業は人の解雇が簡単にできるが、それは国が手厚い転職支援をする積極的労働市場政策をとっているためで、日本に欠けているのは当局への信頼だ、と大使が本質論を指摘。アッという間の2時間で、その信頼の違いがどこから来るかはまた次回に。

企画委員 NHK解説委員　竹田　忠

アントニオ・グテレス
国連事務総長

北朝鮮情勢 答えを急ぐべきでない



このクラブでの会見は8回目、外国要人としては最多になるらしい。ただ過去7回は国連難民高等弁務官時代であり、国連事務総長としては初の会見になった。

国連事務次長が北朝鮮を訪問し、トランプ米大統領がエルサレムをイスラエルの首都に認定した直後の会見となり、メディアの関心は高く、130人が参加した。

国連改革や人間の安全保障、気候変動。事務総長が言及したテーマは多方面に及んだが、会場の関心は北朝鮮情勢にあった。会場からの質問に事務総長はこの問題が喫緊の課題であり、「夢遊病者のようにずるると紛争に入ってはならない」と強調した。また、「目標は平和的に朝鮮半島を非核化すること」としつこいほど繰り返し、「この目的のため有用だと思ったら、どこにでも出かけて行く」と語った。

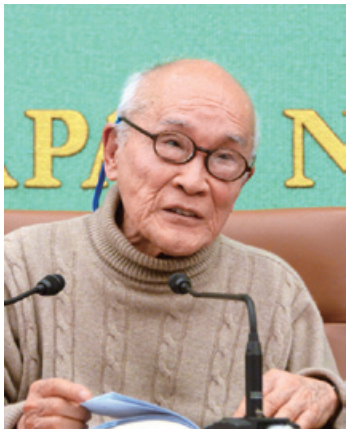
この発言を聞いたとき1998年2月のコフィ・アナン事務総長によるバグダッド訪問を思い出した。米英がイラク空爆を計画する中、アナン氏はサダム・フセイン大統領と直談判し一時的ではあれ緊張緩和につなげた。国連の成功体験である。グテレス事務総長の最初の1年は、朝鮮半島情勢への対処の年となった。もしも事務総長が北朝鮮を訪問することになれば、久しぶりに国連が存在感を発揮することとなるだろう。

事務総長は会見の最後、ブラジルのタンクレード・ネーベス氏の言葉を紹介した。ネーベス氏は大統領に選ばれたものの就任前の1985年、惜しまれながら亡くなった政治家である。「彼は政治家に必要なことを聞かれ、こう答えました。『忍耐、忍耐、忍耐、忍耐、忍耐、忍耐』」。北朝鮮問題は喫緊の課題ではあるが結論を急ぐべきでない。事務総長のメッセージは鮮明だった。

毎日新聞社外信部長　小倉　孝保

谷川　俊太郎　詩人

「詩の言葉」を信じて



12月15日。86歳の誕生日に初めて日本記者クラブのマイクに向かった。60年以上経っても文庫化、増刷が続く出発点の詩編「二十億光年の孤独」について、まずひとこと。

「20億光年なんて時代遅れで、宇宙は137億光年まで育っているのに。なぜいまだに読まれるのか、よく分からないんですけどね（笑）」

3年がかりのインタビューと評伝を交互に重ねた新著『詩人なんて呼ばれて』に沿って、聞き手をつとめる文芸評伝の名手、尾崎真理子氏の真摯な問いに自然体で答えてゆく。

戦後詩や詩壇を超越して輝き続ける無二の存在。創作を支える根源的な思念の一端を垣間見せた。例えば、あらゆる言葉が浪費される中、詩の言葉が長く残るのはなぜか。

「文字を使う作品の中で、詩が一番音楽に近いのは確か。散文の言葉は理性的、左脳的な論理で結びつくけれど、詩の言葉は右脳的な、あいまいな形でつながる。観念的な意味から違うところにシフトして意識下にまで入り込むんじゃないかな」

フッと話題をそらしたかと思うと、次の瞬間には一転、次元の異なる深い領域へ一気に踏み込んでゆく。鮮やかな展開は、詩編を味わう時の驚きにも似てスリリング。

詩に託す信念ものぞかせた。

「言語そのものが、善悪とか美醜とか、概念的に2つに分けてしまう。本当はそんなに簡単に割り切れない。だから、分裂したものを1つにまとめるのが詩の言葉、という意識がある」

右にも左にも与しない「谷川ワールド」の清々しさの秘密が見えた。

最後に本のカバーを外すと、北軽井沢の夏の緑に染まるフィアット500（チンクエチェント）をあしらった表紙が現れた。「装丁のおかげでイタリアからお礼状が来ましたよ」と笑わせ、言葉の魔力に満たされたひとときをしめくくった。

毎日新聞社学芸部編集委員　井上　卓弥

平木　靖成　岩波書店辞典編集部副部長

『広辞苑』を編む　改訂の現場から



1月12日『広辞苑』第7版が、前回改訂からちょうど10年ぶりに刊行される。

辞書編集部を描いた三浦しをんさんの『舟を編む』の主人公、馬締（まじめ）のモデルとされていると紹介された平木さんは「三浦さんから取材を受けたが、その後、何が起きて馬締さんができあがったかが分からない。モデルですと断言する紹介はしないでくださいと言っております」と穏やかな口調ながらきっぱり。

『広辞苑』は1955年の第1版から「国語辞典プラス百科事典」との位置付け。例えば「砂」はどんな鉱物で直径何ミリから何ミリなど地質学の分野で決まっているものが百科事典的な説明。園児と先生が「『砂』で遊びましょう」と言った時にお互いに浮かぶ共通のイメージを抽出したものが国語辞典的な説明だ。

新しい言葉には「日本語として定着した言葉」を入れる編集方針。「ある程度の年数が使われないと収録しない」

国語項目での改訂の柱は2本。基礎語のうち類義語の書き分けと源氏物語や万葉集などからの古典用例の見直しだ。『広辞苑』は語釈に「そっけなく一言で」という特徴がある。「なする・さする・なでる・こする」をはじめとする類義語は似たような語釈になりがちだったが「言葉の意味を正確に書き分けたかった」という。

百科項目では病院関係の言葉を重点的に増補した。「（モバイル版広辞苑では）恐らく病院に行った人からの薬や病気の名前の検索件数が多かったので大きな柱としました」

恒例の揮ごうでは「自由な言葉で対等な関係を」と記した。「正しい言葉が1つあるのではなくて、お互いの中で一番コミュニケーションがとれる言葉遣いを探り合いながら、対等な人間関係を作り上げられるといいなと思って書きました」

言葉と辞書への深い愛情と造詣に満ちた誠実な語り口は誰かに似ている。そう、やはり馬締の何パーセントかは平木さんがモデルだ。

日本経済新聞社記事審査部　本多　俊介

境家　史郎　首都大学東京准教授

戦後の国民の憲法観　「通説」に異議



戦後の日本では、「憲法」の在り方について、政界、学界などにおいて、左右両面の立場からさまざまなアプローチで論議が交わされてきた。しかし、戦後の日本人が憲法をどう見てきたかについて、これまで専門家などが唱えてきたいくつかの「通説」には、先入観に基づく誤解があるのではないか――。

境家氏は、以上のような観点から、戦後の各報道機関、政府の憲法に関する世論調査結果を網羅的に分析。会見では、戦後の各年代で、政治学者など有識者ですら陥った「常識のウソ」を指摘、調査結果をまとめたグラフを用いて解き明かした。

境家氏は、新憲法が制定された1940年代後半は、世論調査の手法が未熟だったことを挙げ、「9条は新憲法制定当初に圧倒的多数の国民から支持された」とする「通説」は、「神話か、少なくとも根拠薄弱。当時の世論は『不明』とするのが誠実な回答だ」と異議を唱えた。高度成長期に、「有権者の改憲志向は低下の一途だった」とする見方も「ステレオタイプ。調査結果で見ると、70年代まで改憲の賛否は拮抗していた」と位置付けた。

こうした「誤解」を生んだ背景として、「憲法改正」自体の是非を問う質問（「一般改正質問」）では、時代によって注目される論点が変わるため、同じ質問でも有権者が受け取る質問の意味が時代によって異なることを挙げた。例えば、一般改正質問は、戦後しばらくは「自主憲法制定」の是非を問う意味合いが強く、後に9条や、「憲法のどこかを修正すべきか」などと変わり、最近では再び9条が意識されている可能性を指摘した。

その上で、境家氏は、憲法に関する各社の世論調査について、一般改正質問は、「意図が曖昧で、解釈の困難を生む」と批判。今後の設問は、将来の憲法改正発議に備えるため、長期的な分析を可能にする「継続性」と同様、質問内容の「具体性」が必要だと注文をつけた。

読売新聞東京本社世論調査部　大田　健吾

どうなる野党 連続会見
野党再建は「一歩一歩」



玉木　雄一郎
希望の党代表
12月22日



枝野　幸男
立憲民主党代表
12月21日



岡田　克也
無所属の会代表
民進党常任顧問
12月20日

大塚耕平・民進党代表は、11月29日に会見。12月号に掲載。

最大野党だった衆院選前の民進党から道を違えた野党リーダー3人の連続会見。浮き彫りになるのは、今なお尾を引く「解党騒動」のダメージの深刻さと、野党再建の難しさだ。

■大きな塊を創る（岡田氏）

小選挙区制導入を柱とする政治改革を掲げて1993年に自民党を飛び出し、対抗政党作りに懸けてきた岡田克也氏（64歳）。「政権交代のある政治を創ると唱えてきた。それが一瞬にして崩れた喪失感があるが、もう一回頑張る」と述懐した。この窮状で自任するのは「一歩引いたところで、しっかり支える役割」だ。

旧民主党・民進党の失敗の本質に触れて「自由な議論で決まった方針には皆が従う」「代表が誰であれ、選んだら皆で支える」ができなかったこと、と政党ガバナンスの未熟を挙げた。

「3党が一つの党になるのはハードルが高い」としつつ「本気で政権を取りに行く気があれば、お互い我慢できる。次の参院選に向けて大きな塊を創る覚悟が大事だ」と訴えた。まず国会内統一会派を目指し、参院選では「比例代表の統一名簿などのさまざまなアイデアがある」と説いた。

安倍晋三首相が自民党総裁3期目の2021年まで続投すれば、もう一度、衆院解散・総選挙を断行するだろう、と指摘。19年は衆参同日選もありうる、と野党再編を力説した。

■候補の一本化には努力（枝野氏）

93年に日本新党から初当選し、旧民主党の結党に加わった枝野幸男氏（53歳）。思えば16年参院選までの民進党は「岡田代表―枝野幹事長」体制だった。岡田氏は「一度じっくり話してみたい」と秋波も送ったが、枝野氏の発言は温度差が大きかった。

衆院選前の「解党騒動」を振り返って「20年来の野党の『大きな塊』論の行き着いた先がこの騒動だと直感し、選挙を通じて確信した」と総括。岡田流の「大きな塊」論に一線を画した。「政権交代が自己目的化し、それを叫ぶほど不信が蓄積した。希望の党の失速は『排除』より民進党が合流を決めたから」と喝破した。

熱弁を振るったのは、新たなパートナー制や、SNS活用など草の根民主主義を旗印とする自党の主体性強化論だ。「現場からの政策の提起や市民的な動きが展開した先に、結果として政権交代が実現できる」という。

「衆院の小選挙区、参院の一人区では野党が候補者を一本化しないと自民党が喜ぶ」と野党候補の一本化には努力する姿勢を示した。ただ、「政党間の取引にはしない」と強調。希望であれ共産党であれ、市民連合などが生活現場から提起する具体的な政策を巡って連携できる場合に限り、一本化に動く方式を提唱した。

■統一会派を真剣に検討（玉木氏）

民主党が政権を獲得した2009年初当選の玉木雄一郎氏（48歳）。党代表に就いてひと月で「足元を固めるのに時間を費やした。党が銀行から億単位の融資を受けるので、初めて保証人になる。手が震えそうだ」と想定外の急展開への戸惑いものぞかせた。

財務省出身らしく、政策にこだわりを見せた。安全保障法制では、憲法違反と見る部分の法改正を提案。9条改正論議には、自衛権の行使の限界や歯止めを明確にする「護憲的改憲論」の立場から応じると明言した。

「農業や介護の現場は外国人の活用なしにもはや成り立たない。このルール作りに正面から取り組む」などと与党が手を出さない課題を先取りする「未来先取り政党」路線を掲げた。「野党がバラバラではダメだと特別国会で痛感した」と政策や国会対応をすり合わせたうえで、統一会派は「真剣に検討したい」とした。

連続会見を締めくくった玉木氏は「失望や失敗を一つ一つ着実に希望に変えていきたい」と述べ、揮ごうは「一歩一歩」。野党再建の道のりの険しさが、四文字ににじんだ。

日本経済新聞社編集委員　清水　真人

IT講座

■第9回：統計ソフト「R」

11・22（水）講師：田中孝憲・報知新聞社メディア局コンテンツ編集部／出席：16人

◎未知の解析ツール、威力を実感

この日のテーマは、統計解析ツール「R」。表計算ソフトExcelから始まったこの講座、純粋文系人間の私には、このところ未知の領域にどんどん入っていく感じがする。

「R」を、文章をバラバラに分解して分析するソフト「MeCab」と組み合わせ、11月の安倍首相の所信表明演説を解析してみる。多用していたのは「政策」「我が国」といった言葉。過去の演説と併せて解析すれば、力点の変化も一目瞭然だ。

講師の田中さんから「何か好きな文章を入れてみて」と声がかかり、10月末の日銀総裁記者会見の要旨を入れてみた。当たり前だが「金融」「物価」が多い。「一度仕組みをつくれば使い回しできる」と田中さん。昨年夏前に当時の防衛相が会見で「誤解」と30回以上繰り返す、というニュースがあったが、「R」を使えば記事執筆も楽だっただろう。

「R」の威力は分かった。使いこなそうと思えば先は長いが、地道に手を動かしていこうと思う。

朝日新聞社デジタル編集部次長　琴寄　辰男

■第10回：野球×データ　最新事例と分析法紹介

12・7（木）講師：上田顕・元東北楽天ゴールデンイーグルス・チーム戦略室長、田中孝憲・報知新聞社メディア局コンテンツ編集部／出席：19人

◎野球界に広がる「データ活用」

球界の変化をひしひしと感じた。報知新聞・田中さんは、球場に設置された弾道測定器「トラックマン」から得られるデータの活用法を例示した。統計ソフトを使い、大リーグのダルビッシュ投手の投球を分析。2016年と17年のリリースポイントの変化をグラフで示した。

腕の振りの変化は本人の発言からも明らかになっていたそうだが、具体的な根拠を示せば記事の説得力は増す。一般に公開されたデータでここまでできるのかと驚くと同時に、報道機関の分析能力を問われる時代が近く来ると危機感も覚えた。

一方、楽天イーグルス・元チーム戦略室長の上田さんは、データ活用を巡る国内プロ野球の現状を解説した。興味深かったのは、「トラックマンを入れれば勝てるとは言えない」との指摘だ。データを解析する体制も整えなければ、効果は限られる。グラウンド外の戦いが激しさを増す未来予想図を見る思いだった。

読売新聞社運動部　深井　千弘

誰でも調査報道

■第10回：デスク、告発が届きました！

11・30（木）講師：熊田安伸・NHK報道局ネットワーク報道部専任部長／出席：28人

◎「ルール」見定め切り込む

優れた調査報道番組をつくり続けているNHKはどのように記者を育成しているのか。講師役の熊田さんが社内の研修資料を使いながらノウハウを惜しげもなく披露した。

「ある大物国会議員の政官業癒着を告発する内部文書が届いた。あなたはどう取材する」。こんなケーススタディーをもとに講義は進む。

工事の情報を得るのに入札調書や官報検索が使えなければ建設業許可申請書、国や自治体の補助金をたどりたければ補助金総覧や補助金調書に当たる――。具体的な資料やデータの調べ方が次々と登場したほか、キーマンの書き残した「黒革の手帳」の入手や業界団体への情報源づくりなど実践的なアドバイスも多かった。

調査報道ではどういう視点で相手に切り込むかも腕の見せ所だ。明確な法律違反がなくても会社など組織の定めるルールから逸脱していれば相手を追及できる。「ルールの発見が大事」という熊田さんの言葉を常に頭に置きながら取材を続けたい。

日本経済新聞社経済部　斉藤　雄太

■第11回：訴訟に備える①

12・14（木）講師：喜田村洋一弁護士／出席：19人

◎記者の基本に立ち返る

「転ばぬ先の杖」。今回の講義を通じて、真っ先に浮かんだのがこの言葉だ。これまでに数多くのマスコミに関わる民事裁判を多く手がけた喜田村洋一弁護士から、改めて取材の基本に立ち返る大切さを教えてもらった。

この中で喜田村先生が強調した一つが「真実性と相当性」だ。つまりは、物事の本質にどこまで迫れたか、どこまで取材をやり尽くせたかということ。事象に関わる関係者に全て当たり、関係資料も全て入手し、これらをいつ行ったか記録を残す。仮に訴えられても、しっかり説明できることが大事だが、これがなかなかできず、完全取材は難しいことを改めて痛感させられた。

やはり一つ気になったのが「取材源の秘匿」の問題。裁判になった時に記者はそれを守ることができるのか。「永遠の課題」と語った喜田村先生。こうした場面に遭遇しないためにも、丁寧で慎重な取材をしながら、調査報道の精度を上げたいと強く思った。

NHK報道局ネットワーク報道部　郡　義之

カタルーニャ独立問題

独自の言語への誇り 嫌スペインと背中合わせ

青田　秀樹（朝日新聞社）

何度も訪ねた土地でも、そこで暮らし、普段から市民と接していなければ、人や街の息づかいを感じつつ原稿を書くのは容易ではない。スペイン北東部カタルーニャ自治州の独立問題は、その典型だ。

意見が割れて対立する独立派と反独立派。大規模なデモや集会に足を運ぶわけではない「ふつうの人」の思いをくみ取りたい。テロの取材で昨年8月に出張した際、居酒屋（バル）で隣り合わせた、おやじさんとの会話を思い出した。

オリーバスではなくオリーベス

「うまいか」と聞かれ、下手なスペイン語で「オリーバス（オリーブ）、うまい」と応じると、「違う、オリーベスだ」と返ってきた。カタルーニャ語だ。「オリーベス、うまい」と言い直すと、「だろう」と満足げな笑顔を見せてくれた。

言葉の問題は、カタルーニャの独立運動を考える上で欠かせない。フランコ独裁体制のもとで自治が奪われ、カタルーニャ語は禁じられた。名前をスペイン風に変えた人もいたという。1975年のフランコ総統の死去後は民主化が進み、いまは自治州の公用語として、公教育はカタルーニャ語が基本。「カタルーニャ人」の大きなよりどころだ。

バルでもタクシーでも、スペイン語のありがとう「ムーチャス・グラシアス」ではなく、カタルーニャ語で「モルテス・グラシアス」と言うようにした。大いに喜ぶ人は独立派だなと察しをつけて雑談する。奪われた言葉を取り戻し、守り続ける誇りが伝わってくる。

親子そろって仲間外れ

ただし、理解に苦しむことも多い。たいていの人が話すスペイン語は学校教育で「外国語」の扱い。州法が認めたスペイン語での授業の一部導入を求めた親子には、仲間外れが待っていた。ある母親は「エゴイスト」と言われ、保護者が連絡をとりあうスマートフォンのチャットグループから抜けた。少女は、クラスみんなが集まるお誕生会に呼ばれない。州営の放送局は、娯楽番組などで、スペイン語を話す人物を、おっちょこちょいや悪役として登場させがちだという。独自の言語への誇りは、スペイン語への敵視やさげすみと背中合わせになりがちだ。

サッカーのスペイン1部リーグの強豪バルセロナ（バルサ）の試合では、カタルーニャの「独立旗」が揺れ、フランコ時代に自治を奪われた記憶を刻みとどめる役割を果たす。

独立を求める人たちは、中央政府のラホイ首相をしばしば「まるでフランコだ」と呼ぶ。自動車などの産業が豊かなカタルーニャから税という形で富を奪い、自治を奪って市民を虐げようとしている、と。憲法裁判所の差し止めを振り切って実施した10月1日の住民投票を「問題ない」と言い切り、州議会の一方的な独立宣言に沸いた市民の心には「嫌スペイン」の感情がのぞく。

中央政府は「法の秩序を取り戻す」として州の自治権を停止し、州議会を解散。司法当局は、プッチダモン前州首相らに反乱罪の容疑をかけた。12月の出直し州議会選で独立派の市民は「スペイン政府の強権ぶりはひどい。独自の文化や言語を守るには独立がベストだ」と話した。

結果は、得票率計47％の独立派が、定数135のうち70議席を抑えて過半数を維持した。ただし第1党は反独立派で、得票率は計43％。世論は割れる。双方の立場から同じ言葉を聞いた。「もう疲れた」

分断の修復はたやすくない。「法治」を繰り返す中央政府が「法を犯してでも独立を」と考えた人たちとどう向き合うかにもかかっている。



カタルーニャの独立を訴える人たちの集会（バルセロナ/2017年9月/朝日新聞社提供）

あおた・ひでき▼1991年入社　経済部　ヨーロッパ総局　国際報道部次長などを経て　2014年からパリ支局長

座間9遺体事件

ネット時代を象徴 SNSで様変わりする事件取材

勝田　真司（日本テレビ）

昨年10月30日、本社でデスクをしていると警視庁担当記者から連絡が入った。「八王子で行方不明になっていた女性の捜査で、クーラーボックスに入った複数遺体が、座間市のアパートで見つかった」というものだった。

容疑者の男の身柄が確保されていることも併せて、23時からの「NEWS ZERO」で現場から中継記者リポートで報じた。平成の事件史に残る殺人事件のスクープとなった。「9人の切断遺体」というショッキングかつ極めて残虐な事件であるだけでなく、容疑者と被害者がSNSを通じて知り合ったという経緯、そして「実名・匿名」問題でも、まさに〝今の時代〟を象徴する事件となった。


9人の遺体が見つかった現場アパート
（神奈川・座間市／日本テレビ提供）

事件記者の基本かつ最大の仕事は、靴をすり減らしての徹底した現場周辺取材と、夜討ち・朝駆けで事件の真相に迫ること。逮捕されている容疑者と、犠牲者として語ることができない被害者の人間性に迫り、社会に伝えることである。これが「SNS」によって様変わりしている。

2016年7月に起きた相模原市障害者施設46人殺傷事件では、容疑者が極めてゆがんだ差別思想を独自する動画をネット上に公開していたのを弊社記者が発見。それは犯行動機にダイレクトにつながるものだった。

座間事件の容疑者の男も、SNS上で堂々と「首吊り士」という名前で女性たちと接触し交流。後に殺害に至る犯行の手口なども書き込んでいたことから、事件に密接に結びつく要素としてSNS上のやりとりをニュースで報じた。地道な現場取材の重要性は変わらないものの、事件の真相に迫る上で、サイバー空間上の取材が重要であることを象徴する出来事だった。

実名か匿名　判断の難しさ実感

「実名・匿名」でも座間事件は、〝今の時代〟を象徴する事件といえよう。犯行の特異性はあるものの、従来からの日本テレビの報道の原則では、被害者を「実名・顔写真付き」で報じる案件である。ところが今回は、遺族や代理人弁護士から匿名報道の要請が相次いだ。その一つ一つは切実であり、悲痛であり、プライバシー保護の観点からも軽々に無視できるものではない。

事件被害者については、性犯罪被害等を除き、実名報道の持つ意味、社会性と公共性から原則「実名」を貫いてきた。身元判明の警察発表時、実名・顔写真付きで報じる判断に異論はなかった。しかし、その後の続報や再逮捕の時は、被害者を実名とするべきか、顔写真を報じるべきか、難しい判断を迫られた。結果、新聞・テレビ各社で対応が分かれた。

もう一つ判断を難しくしている要素に〝ネット〟がある。ネット上ではテレビが報じた被害者の写真や動画が勝手に転載されて拡散し、興味本位や誹謗中傷が伴う書き込みがなされる場合もある。その一つ一つをわれわれは削除できない。遺族らからの要請にもネット上での〝二次被害〟に言及するものがあった。そういう点でも〝今の時代〟を象徴しているといえる。

さらに、なぜ9人が殺害されるまで事件が発覚しなかったのか？　ツイッターやLINEなどの爆発的な普及で誰もが気軽にSNSを利用できる現代。容疑者と被害者は、誰にも知られることなくネット上で出会い、それをきっかけに、メッセージのやりとりを通じて関係を深め、リアル空間での呼び出しに応じた被害者は、そのまま事件に巻き込まれていった。

容疑者が次々と犯行を重ねることができた今回の事件は、見ず知らずの人を結びつけるSNS利用の危うさもあぶり出している。事件を深刻に受け止めた政府は関係閣僚会議を開催し、ネット事業者、自治体や民間団体などが取り組む再発防止策をとりまとめた。

かつた・しんじ▼1995年入社　警視庁キャップ　北京特派員などを経て2016年から社会部副部長兼デスク

新・列島報告⑰　高知県
明治維新150年

地域史をより身近に「土佐古地図ナビ」企画が好評

楠瀬　慶太
（高知新聞社）

幕末の高知城下、帰宅中の土佐藩仕置役・吉田東洋が、現在の高知市の中心商店街アーケード内・居酒屋「長宗我部」前で、土佐勤王党の刺客に襲われ、雑貨店「ほにや」前で絶命した。土佐藩が尊王攘夷へかじを切り替え、維新のうねりに巻き込まれていくきっかけになった暗殺事件だ。

■コスプレ記者が話題に

その様子を、高知県の観光キャンペーン「志国高知　幕末維新博」に合わせた2017年1月1日付正月紙面の特集企画として、高知新聞記者4人が、東洋や刺客のコスプレをして現代の風景で再現した。人が行き交う見慣れた商店街で、武士が斬り合いをするというミスマッチな設定が目を引いたのか、問い合わせも多く、ホームページ閲覧数が跳ね上がるなど予想以上の反響があった。

世間はNHKの番組「ブラタモリ」に代表される町歩きブーム。高知県内では、本紙の正月紙面を使った歴史愛好家による町歩きツアーも開かれ、予約が殺到した。

昨年から今年は大政奉還・明治維新150年など歴史の節目を迎えている。坂本龍馬らを輩出した高知県では歴史関連の展示やイベントが行われているが、県の施策は県外客をメインターゲットにした施設型観光の性格が強く、県民の関心の低さが課題だと感じていた。

幕末維新博をきっかけに「身近な土佐の歴史に興味を持って博物館などを訪れ、地域史や文化財を守り伝える意識を県民に持ってほしい」という地元紙の提案が、正月紙面の特集だった。特集企画は年間企画「土佐古地図ナビ」として引き継ぎ、17年4月から毎月最終水曜日に見開き特集で掲載している。

この年間企画は、歴史事象を再現する「歴史再見」と、筆者が地元ガイドらと古地図をもとに町歩きをする「史跡散策」の2本立ての構成。これまでに「高知城攻防戦」「鏡川をさかのぼる」「牧野富太郎の植物観察会」「超遠い！土佐藩参勤交代」など9回掲載し、「歴史再見」のコーナーでは動画も撮影、高知新聞のフェイスブックで公開している。

（https://www.facebook.com/kochinewsuke/）

■筆者が時代考証、衣装手配も

年間企画「土佐古地図ナビ」は、新聞社と住民で作る紙面だ。歴史事象の再現に際しては、大学院で歴史学を学んだ筆者が、学芸員や郷土史家と共に古地図や古文書を読み込み、時代考証している。衣装も、企画に全面協力してくれる県内の博物館やアマチュア劇団、着物愛好家らから調達している。



「古地図ナビ」企画で江戸期の河川工事を再現
（高知新聞社提供）

歴史事象の再現ロケには、地元住民と新聞社の支局長らが出演する。江戸期の河川工事を再現した「夢の山田堰」編には、地元の商工会青年部員ら26人が参加した。

ロケは、歴史事象が起こった実際の場所や史跡で行う。参加者には撮影を通して歴史を学んでもらい、読者には知人が出演した特集紙面を見て、地域史を身近に感じてほしいという思いがある。また、史跡近くの商店をロケ場所にするなど、地域への観光客の誘客を促進する狙いもある。

歴史ファンならずとも新聞を開けて、現代と過去が融合したシュールな紙面に笑い、少しマニアックな歴史事象の説明に興味を持ってくれればという思いで紙面を制作している。

昨年から高知でも龍馬の手紙など新史料の発見が相次いでいるが、幕末の「偉人」の話題の発信ばかりではいけない。

「古地図ナビ」は今年3月まで掲載予定。楽しく、面白く、今に続く足元の地域史を見つめ直す明治維新150年の節目にしていきたい。

くすのせ・けいた▼2009年入社。窪川支局長などを経て16年4月から学芸部記者（歴史民俗担当）

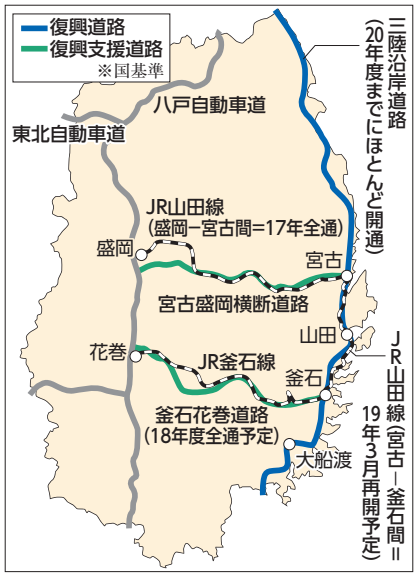
被災地通信㊷ 岩手県

交通網の開通・再開
「その後」を考える時期に

稲垣　大助（岩手日報社）

東日本大震災後の取材で特に印象的なのは、鉄路や道路の開通・再開を多くの人が復興の「象徴」と捉えているということだ。私たちもその都度、住民らの喜びの声を紙面で伝え、復興の後押しをしてきた。だが、震災から6年10カ月がたち、一過性の報道だけでなく、開通の「その後」を住民と共により考える時期にきていると感じている。

昨年11月、降雨や融雪による土砂崩れで起きた脱線事故で一部区間が不通となっていたJR山田線盛岡―宮古間（102・1キロ）が2年ぶりに再開した。盛岡と沿岸の被災地を結ぶ大事な横軸。盛岡駅構内は一番列車の出発3時間前から多くの乗客が列をなし、発車を知らせる警笛が復活を印象づけた。



JR山田線復旧　期待と不安

事故現場に近い宮古市川井の陸中川井駅の線路沿いでは、約300人の住民が大きな横断幕を掲げ、列車を歓迎。住民は「一時期は廃線になると思ったのでありがたい」「（復旧前は）乗客も少なく、寂しい雰囲気だった。これを機にたくさんの観光客が来てほしい」と一様に喜びつつも、今後の利用者減への不安もにじませた。

山田線（盛岡―釜石間）は事故前の2014年度、1日1キロ当たりの利用者を示す平均通過人員が279人とJR東日本の在来線66線区で最も少なかった。実際、再開日に満員だった車内の様子は今、事故前とほぼ変わらない。JRや行政は、開通時こそ旅行雑誌での情報発信や臨時列車の運行で利用を促したが、それも一時的な対策で終わっている。

本県では、震災で被災した鉄路がバス高速輸送システム（BRT）で再開したJR大船渡線を含めると、山田線宮古―釜石間（55・4キロ）以外、既に復旧。この区間もJR東日本が直した上で三陸鉄道（宮古市）に移管し、19年3月に再開する。ようやく全線開通のめどが立つ段階まできたところだ。

その意味で、交通網の復興は次のステージに移る。もちろん、被災地の釜石市が会場になる19年ラグビーワールドカップなどの誘客を見据えて、JRや三陸鉄道も連携して県内を回遊できる旅行商品や割引サービスを増やすなどの対策を取ることは重要。だが、将来にわたって路線を存続させるためには地域のマイレール意識、強く言えば「責任感」を高めていけるかが鍵を握る。

鉄道に加え、県内では被災地を縦貫する復興道路、内陸と沿岸を横に結ぶ復興支援道路の整備も進む。昨年11月には、震災後に事業着手した復興道路、復興支援道路としては初めて三陸沿岸道路（仙台市―八戸市）の山田宮古道路（14キロ）が開通。20年度には盛岡市と宮古市をつなぐ宮古盛岡横断道路（100キロ）を含む路線のほとんどが完成する。

インフラを復興にどう生かすか

復興道路は災害時の緊急避難場所になり、救命医療を支える「命の道路」。大消費地までの時間・コストが短縮するため生鮮品の競争力は高まり、企業誘致や港湾の利活用にも期待がかかる。今後はこのインフラを復興後の地域でどう生かしていくのか。一部企業は動きを強めているが、住民と一緒になった戦略のさらなる磨き上げが必要だろう。

私たちも毎年3月11日を前に復興計画の点検をするなど、インフラ整備の状況を定期的にチェックしている。だが、開通・再開といった動きを捉えるだけでなく、その後の復興にどう生かすのかという長期的な視点を提示することに力を入れていかなければならない。それが、地域に寄り添うという私たちの報道姿勢にもつながると信じている。

いながき・だいすけ▼2008年入社　二戸支局　奥州支局などを経て　14年4月から報道部記者

私が会ったあの人

二人の独女性メダリストの涙

岸本　卓也（下野新聞社）

東京五輪・パラリンピックへの期待が膨らんでいる。五輪憲章には「スポーツを通じて相互の理解を深め、世界平和を目指す」と目的を規定している。東京大会が世界平和に寄与することを切に願う。

毎日新聞社の記者として1992年のバルセロナ（スペイン）夏季五輪と94年のリレハンメル（ノルウェー）冬季五輪に派遣された。夏と冬の五輪をどちらも取材できたことは幸せであった。

バルセロナ五輪は第二次大戦後の東西冷戦が終結した直後の五輪だった。なかでも資本主義と社会主義の二つの国に分断されていたドイツが統一ドイツの選手団を送り込んだことで注目された。

旧東ドイツは五輪を国威高揚の絶好の機会として選手を厳しく鍛え、メダル獲得数で上位国だった。だが、ドイツ統一後はドーピング疑惑を招き、選手たちは「サイボーグ」などと西側各国から揶揄されていた。

競泳女子の400メートル自由形で金メダルを獲得したダグマール・ハーセ選手がドイツのテレビ局のインタビューで泣き始めた。うれし涙かと思ったが、そうではなかった。「私たち旧東ドイツ出身選手は冷たい視線にさらされている」と訴えた。

東西ドイツの統合は対等合併というよりも旧西ドイツによる吸収合併であった。民族統一の歓喜が覚めた後、旧東ドイツの人々の旧西ドイツの人々へのコンプレックスが深刻化していた時期だ。旧東ドイツの優秀で誇り高い選手たちの心はメダルでは癒せないほど傷ついていたのだ。



ベルリン五輪・競泳女子200m平泳ぎで優勝した前畑秀子（右）と2位のマルタ・ゲネンゲル（中央）両選手（1936年8月11日/毎日新聞社提供）



バルセロナ五輪・競泳女子400m自由形で優勝したダグマール・ハーセ選手（1992年7月28日/毎日新聞社提供）

そもそもバルセロナ五輪は歴史的にもドイツと因縁が深かった。1936年の五輪の開催地にバルセロナが立候補したが、ナチス支配下のドイツ・ベルリンに敗れた。

スペインはベルリン五輪を「人種差別的だ」とボイコットした。

私はバルセロナ五輪の2年後の94年に特派員としてドイツに赴任した。翌95年2月にベルリン五輪の200メートル平泳ぎで金メダルを獲得した前畑秀子さんが80歳で死去した。私は前畑さんに決勝で敗れた銀メダリストのマルタ・ゲネンゲルさんにインタビューを申し込んだ。

ゲネンゲルさんは当時84歳でケルン近郊で家族と共に穏やかに暮らしていた。ライバルの前畑さんに負けたが、77年に二人はベルリンで再会し、50メートルを一緒に泳ぎ、友情を育んだ。それだけに前畑さんが亡くなったことを告げると、落胆の表情を隠さなかった。

戦争の時代を生きたドイツ人にヒトラーやナチスについて意見を求めることは気が引けるが、あえてゲネンゲルさんにヒトラーについての思い出を聞いた。ゲルマン民族が最も優秀な民族であることを五輪で証明したいヒトラーは出場するドイツ選手の壮行会で一人一人に握手して激励したという。

ゲネンゲルさんは苦しい表情で「壮行会で優しく手を握られた。あのころはひどいことをする人には思えなかった」と語った。そして、涙を浮かべ、「ヒデコ（前畑さん）や私が生きた時代は過ぎ去った」と遠くをながめるようにつぶやいた。その5カ月後に前畑さんを追うように亡くなった。

スポーツに打ち込んだ二人のドイツ人女性の流した涙は激動の時代を映し出していた。

（きしもと・たくや　代表取締役社長）

次号は才木邦夫さん（長崎新聞社）にバトンが渡ります。

日本記者クラブ賞・特別賞の推薦を

応募締め切りが1月31日（水）に迫ってきました。積極的な推薦をお願いします。

【日本記者クラブ賞】

会員および会員社に属する記者が対象です。取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。クラブ会員であればどなたでも推薦できます。

【日本記者クラブ賞特別賞】

原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰します。ただし、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も特別賞の対象となります。推薦はクラブ会員だけでなく、日本新聞協会および日本民間放送連盟加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。

両賞は日本のジャーナリズムの高い水準と業績を示すもので、日本記者クラブの公益事業でもあります。

【応募方法】

推薦者は所定の用紙で推薦理由（2000字以内）と参考資料を添えて提出願います。

お問い合わせは事務局の本庄（03―3503―2754）まで。

マイBOOKマイPR

■パラダイス文書―連鎖する内部告発、パナマ文書を経て「調査報道」がいま暴く

奥山　俊宏（朝日新聞社編集委員）

メガ調査報道　当事者の視点　租税回避地（タックスヘイブン）と各国の政治家や大企業との関わりを明らかにした「パナマ文書」「パラダイス文書」。非営利の報道機関が主導し、情報技術を駆使して、テラバイト単位の秘密電子ファイルを分析し、数十カ国、数百人の記者が協力しあって共同取材の末に一斉に発信を始めた。国境の壁、組織の壁を越えるメガ調査報道。次々と連鎖し、威力を増すテラ内部告発。そうしたこの10年の時代の変化を当事者の視点で描いた。



朝日新聞出版
1,404円

■朝鮮戦争は、なぜ終わらないのか

五味　洋治（東京新聞論説委員）

朝鮮戦争から考える半島危機　北朝鮮と米国の対立が日増しに激しくなっている。この対立の根には、朝鮮戦争（1950～53年）で生まれた「朝鮮国連軍」の存在がある。米軍を中心とした多国籍軍である朝鮮国連軍は今も有効な組織であり、国連安全保障理事会の議決なしに北朝鮮への武力行使が可能だ。また、日本国内の米軍基地も後方基地として使える。アジアに唯一残った冷戦構造の解体が、朝鮮半島における緊張緩和の近道と呼びかける。



創元社
1,620円

■「ポスト・グローバル時代」の地政学

杉田　弘毅（共同通信社論説委員長）

感情と地政学が渦巻く世界　地政学ブームだが、地政学だけで世界は決まらない、との信念で書き上げた。地政学の祖マッキンダーの「地理の奴隷になるな。知恵で乗り越えろ」との説法の方が、これまでの国際取材の経験からしてしっくりきたからだ。

しかし、今は人間の「知恵」よりも「怒り」がうなりを上げて、世界を歪めている。怒りの反響板ソーシャルメディアも力を発揮している。怒りの根源である格差解消の手だては見えない。そして民主主義は劣化し、元凶である格差や自分第一主義を解消する手だては見えない。

感情と地政学が渦巻く地球の現在地を、取材ルポ中心で描きました。



新潮選書
1,512円

■1967中国文化大革命写真集

荒牧　万佐行（元毎日新聞社）

文革時代の人々の姿　1967年1月から2月の約2週間、毎日新聞中国特派視察団として、深圳、広州、武漢、北京、上海を足早に回った。カメラを向けると〝われわれの問題だ〟写真はヤメロ、と何度も追いかえされた。これらの写真の中から160枚の写真を選び①街は巨大な掲示板になった。②議論を尽くし社会と自己を改造する。③ひたすら歩く。④群れる、好奇心。⑤労働は権利だ。⑥天の半分。⑦生活の中の革命。7章に分類した。



集広舎
2,700円

会員の新刊書をご紹介します　原稿をお寄せください

会員の皆さまが出版した本を紹介しています。200字程度で内容や狙いなどをおまとめください。お問い合わせは左記まで。

担当：青山幹史
電話：03―3503―2729
メール：aoyama@jnpc.or.jp

特別賛助会員と各社記者の懇談会（12.12）

カナダ産スパークリングで乾杯



主要各社との懇談の機会をつくってほしいという、大使館を中心とする特別賛助会員の要望でスタートした12月恒例の懇談会。

今回は外信担当者に加えて、政治・社会・経済の各部にも呼びかけて開催しました。約40人が参加。国や社を超えた交流の場となりました。

出席した国連食糧農業機関（FAO）の岡部桂子広報官が「日本の食品ロスは年間621万トン。ぜひ今夜の食事も残さず食べて」と呼びかけて中締めとなりました。カナダ大使館からご提供いただいたカナダ産のスパークリングワインも好評でした。（村田茜）

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■奥野誠亮先生一周忌の集い

2016年11月に103歳で死去した元法相の奥野誠亮氏を偲ぶ会が開かれた。当時の番記者らが集まり、奥野氏の思い出を語り合った。（12.4 小会議室）

■司馬遼太郎賞　奥山俊宏朝日新聞記者が受賞

第21回司馬遼太郎賞（司馬遼太郎記念財団主催）の選考委員会と記者発表が開催された。受賞作は朝日新聞編集委員の奥山俊宏氏の『秘密解除　ロッキード事件』（岩波書店）。現役の新聞記者の受賞は初めて。（12.5　小会議室）

■長崎大学「平和と核軍縮」創刊　発表会見

長崎大学は2017年12月６日に英文のオンライン学術誌「平和と核軍縮」を創刊した。調漸・学長特別補佐、吉田文彦・同大核兵器廃絶研究センター副センター長らが発表会見を行った。同誌は被爆地の視点で核廃絶に向けた研究成果を紹介するもの。無料で閲覧、ダウンロードできる。

詳細は同大学のウェブサイトに（http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/j-pand/）。（12.6　大会議室）

■平和・協同ジャーナリスト基金賞贈呈式

平和や人権擁護などに貢献した報道や作品を表彰する平和・協同ジャーナリスト基金賞の贈呈式が行われた。大賞にはRKB毎日放送製作のドキュメンタリー映画「抗い　記録作家林えいだい」が選ばれた。奨励賞は東京新聞の望月衣塑子記者らが受賞。詳細は同基金のウェブサイトに（http://www.pcjf.net/index.html）。（12.9　大会議室）

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBによる定例の勉強会。萩生田光一・自民党幹事長代行（12.6）、福山哲郎・立憲民主党幹事長（12.13）を招いた。

新しいOB会員

横田　弘幸（よこた　ひろゆき）



1974年読売新聞入社。地方部内新課長、事業局管理部長、事業局次長、読売日本交響楽団理事長などを務め2014年退社。現在、学校法人佐野学園神田外語グループ統括主監。

勉強のつもりで、入会させていただきました。酒にまつわる様々なエピソードを調べ、折に触れ取材旅行を楽しんでいます。

囲碁同好会「大軒杯」田中信義会員が初優勝



年末恒例の囲碁同好会「大軒杯」が12月16日（土）に開催され、田中信義さん（写真＝個人Ｄ会員・NHK出身）が初の優勝を果たしました。

まず14人が２組に分かれて３局を戦い、３連勝で両組のトップとなったのは田中さんと松本昭男さん。両者による決勝戦は田中さんの六子局。中盤で白が大石を取られながらも、ジワジワと地を稼ぎ、並べてみればなんと黒・田中さんの一目勝ち！２年前の夏期大会での優勝に次いで、２度目の栄冠に輝きました。

新年は１月27日（土）から例会がスタートします。初参加の方も大歓迎です。お問い合わせは事務局の河野まで。

■会議報告

●第484回会員資格委員会（12.13　小会議室）

2018年１月１日付入退会を審議し、理事会に答申した。

出席　小松委員長、栗原、佐伯、根本、神田、青木の各委員。

●第480回企画委員会（12.18 10階ホール）

2018年予想アンケート10問を作成した。

出席　西村委員長、坪井、橋本、今井、別府、小川、川上、山田、宮内、島田、出川、川戸、川村、福田、ワーグナーの各委員。

講演会開催のお知らせ

公益財団法人新聞通信調査会（理事長・西沢豊）はジャーナリストの田原総一朗氏を講師に招いて、「時代を読む～メディアの役割は？」という演題で特別講演会を開催する。入場無料、事前登録は不要。

【日時】１月31日（水）午後３時30分～５時（講演１時間、質疑応答30分）開場は午後３時から。

【会場】時事通信ホール
（東京都中央区銀座５－15－８）

【問い合わせ】新聞通信調査会
電　話：03-3593-1081
メール：chosakai@helen.ocn.ne.jp

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 睦月懐石（2/2まで）

先付：ふぐの煮こごり　お椀：海老団子　造り：三点盛り　焼物：鰆の照り焼き　煮物：信田巻　揚物：レンコン挟み揚げ　食事：稲庭うどん　水菓子：季節の果物　グラス冷酒付き（5,400円）

ふぐコース（2/2まで）

前菜のほか、ふぐ刺し、ふぐの唐揚げ、ふぐ鍋、雑炊とデザートにアイスクリームがついたふぐづくしのコースです。お一人5,940円で、お二人からお受けします。ご予約をお願いします。

（板長：大井由光）

洋食 季節のおすすめコース（2/28まで）

寒鰤のカルパッチョ・ラビゴットソース仕立て、蟹とほうれん草のコンソメ、牛フィレ肉のステーキ・冬野菜添え、プリンアラモード、パン、コーヒー付き（3,780円）。ランチ、ディナー（土曜はランチのみ）ともにご利用いただけます。

（シェフ：黒須修一）

ラウンジでスイーツはいかがですか

ラウンジでアイスクリームなどスイーツを召し上がっていただけます。特に抹茶アイスが好評です。そのほか詩人の谷川俊太郎さんにお贈りしたアップルパイ（3ページに関連記事）や日替わりケーキを用意しています。

アイスクリームは270円。ケーキはワンカット378円です。アフタヌーンティーにいかがでしょうか。

会費の領収書をお送りします

今年も確定申告の時期が近づいてきました。必要な方には、1年分の会費の領収書をお送りしています。ご希望の方は経理担当（03-3503-2727）へご連絡ください。

HP更新情報 https://www.jnpc.or.jp/

■会見詳録 会見の全文文字記録版

●羽生善治・永世七冠　記者会見（2017.12.13）

昨年12月5日に永世七冠の資格を獲得した羽生善治氏の1時間にわたる会見の全文が読めます。

■市川雄一・公明党書記長の会見動画があります

昨年12月8日に82歳で死去した元公明党書記長の市川雄一さんは、2015年11月27日に戦後70年企画のゲストとしてクラブで会見しました。

2018年はどんな年？予想アンケート投票を

1月19日（金）午後6時から開催される新年会員懇親会の席上で、昨年の「予想アンケート」の結果発表と今年の投票が行われます。投票用紙を今号と一緒にお送りしました。

懇親会に出席されない方は、FAX（03-3503-7271）もしくは郵送でご投票ください。クラブのウェブサイトからも投票できます。投票の締め切りは1月25日（木）です。

アンケートは今年で46回目。年末に、企画委員会が知恵を出し合い、問題を作成しています。新聞のコラムでも取りあげられ、余興で楽しまれる方もいるようです。クラブのウェブサイト（https://www.jnpc.or.jp/outline/surveys）に、1973年からの問題をすべて掲載しています。

＜法人会員代表変更＞

電波新聞社
　平山勉代表取締役社長（旧・平山哲雄氏）
東奥日報社
　遠山仁東京支社長（旧・佐藤秀樹氏）
南日本新聞社
　佐潟隆一代表取締役社長（旧・逆瀬川尚文氏）

訃報　小池唯夫会員（元毎日新聞社社長、85歳）と原寿雄元会員（元共同通信社編集主幹、92歳）が、2017年11月30日に死去されました。小池さんはクラブの施設運営委員長と企画委員長を、原さんは施設運営委員長をそれぞれ務められました。

片岡俊夫会員（元NHK理事、89歳）が12月19日に死去されました。

心からご冥福をお祈りいたします。

経済見通し研究会（会場はいずれも10階ホール）

15㊊	15：00～16：30 松村嘉浩氏「2018年　アベノミクスでバフル本格化」
17㊌	13：30～15：00 吉野直行・アジア開発銀行研究所所長 「中国経済とアジア」
	16：00～17：30 加藤出・東短リサーチ社長「日銀超緩和策の副作用と2018年の世界経済」
18㊍	14：30～16：00 早川英男・富士通総研エグゼクティブ・フェロー 「求められるマクロ政策の枠組み転換」
19㊎	13：30～15：00 山田久・日本総研調査部理事「2018年労働市場の課題」
22㊊	14：00～15：30 渡辺博史・国際通貨研究所理事長 「最近の世界経済の動向―マクロ経済・金融を中心に」
29㊊	14：00～15：30 伊佐山元・WiL共同創業者、CEO 「日本企業とイノベーション～シリコンバレーの利活用」

クラブの電話　ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
●貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724
●受　付……☎3503-2721
●会員事務……☎3503-2727
●経　理……☎3503-2728
●クラブ行事への申し込み……☎3503-2722
●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況
●法人会員：133社　●基本会員：744人　●個人会員：1,251人
●法人・個人賛助会員：61社・135人　●特別賛助会員：106人
●名誉・功労会員：11人　●学生会員：134人　計：194社・2,381人

会報委員会
委員長＝小林　毅
委　員＝梅原　季哉　大寺　廣幸　勝沼　直子
草間　嘉幸　小池　敏夫　河野　博子
仙石　伸也　高橋　雅哉　長友佐波子
吉岡　政道
（事務局：本庄五月　青山幹史）
☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊



撮影：清水　武（報知新聞東京本社編集局写真部）

タオルでつった10キロのダンベルを使い首と顎を鍛える村田諒太選手　2017年11月28日

勝負師の涙と汗

「泣いていません」。村田諒太選手が昨年10月22日、世界ボクシング協会（WBA）世界ミドル級王座挑戦で勝った直後、顔をくしゃくしゃにしてインタビューに答えた言葉だ。

その時は、なぜ素直に認めないのだろうと思った。村田選手はこの日、5カ月前の王座決定戦を疑惑の判定で落とした対戦相手のチャンピオンに雪辱した。不運な挫折から再起を果たすという、誰もが好む成功物語なのだから、感涙をストレートに表現してストーリーを完結してほしかった。

そこで思い出したのが囲碁棋士の趙治勲だ。かつてタイトルを失い、こぶしで真っ赤な目をぐりぐりこすりながら、「泣いていない」を繰り返した。子どもの頃、手合いに負けて帰った師匠の家で勝敗を尋ねられ、「勝ちました」と自分でも思わず答えてしまったと自著にある。

二人とも勝負師なのだ。簡単に負けを認めない、徹底して勝ちにこだわるということなのだろう。

村田選手は試合後、「僕より強いミドル級王者がいる。そこを目指して頑張りたい」とも語った。同じ階級に複数の王者がいること自体が問題なのだが、世界主要3団体の統一王者ゲンナジー・ゴロフキンへの「挑戦」を見据えているのは、ファンには分かる。

写真はタイトルを獲得して1カ月後に本格的な練習を再開した時の姿。勝負師はすでに次の戦いに挑んでいる。

なんとも苦しそうな表情のチャンピオンだ。でも、汗は光っている。

（谷　定文）